

比較文化 II [第9回]

丸山純 (jun@site-shara.net)

●トッドの移民論……ドイツ・直系家族の差異主義

▼ドイツは直系家族であり、アングロサクソンの絶対核家族よりも“粗暴な”差異主義

直系家族は兄弟の不平等を特徴とし、人間は互いに異なると認識

子どもの一人（通常は長男）が財産を相続して親と同居

それ以外の兄弟は家を出て別の仕事に就く

人間の平等には関心を持たず、差異に敏感 → 差別につながる

父親の権威は中心的権力の下にまとまることを求める → 「権威主義家族」と呼ぶ

直系家族社会は、同じ文化の小集団を被差別民として指定することがある

日本における部落民

南西フランスにおけるカゴ (Cagot)

これと似た立場にいたのがドイツのユダヤ人

宗教が異なるためいっそう疎外されていた

▼新たな差別を生んでいるトルコ系

アメリカが人種別統計を作成するのに対し、ドイツの統計では人間をプロテスタント、カトリック、ユダヤ教徒、イスラム教徒に分ける

ドイツへの移民のうち、トルコ人は肉体的にはイタリア人、ギリシア人とほとんど変わらないが、外婚率が低いのはトルコ人だけ

1990年には、トルコ人を父とする子供のうち母がドイツ人なのは4.4%

トルコ人を母とする子供のうち父がドイツ人なのはわずか1.2%

在独トルコ人の1984年の出生率は2.5

ほぼ同時期、在仏アルジェリア人が4.2、在仏モロッコ人が4.5、在仏チュニジア人が4.7、在英パキスタン人が5.3

移民のなかでも、トルコ系が近代化しているのは明らか

しかしその後、1990年になると、在独トルコ人の出生率は3.4に上昇

これは隔離に対する防衛反応

トルコ人に対する暴力も散発し、ネオナチによるトルコ人女性の放火殺人も起きている

▼逆説的に、トルコ人の隔離が別の平等を実現

ユーゴスラビア人は家族構造も宗教もドイツ人と異なるが、統合が順調に進む

1989年のベルリンの壁崩壊以降の東西ドイツ人の対立を緩和する働きもしている

ソ連の崩壊で、これらの地域に散らばって居住していたドイツ系住民がドイツに戻ってきたが、彼らもまたドイツ語が十分に話せないものの、順調にドイツ社会に同化

アメリカが黒人を不可触賤民化して差別することで、黒人以外の人種のアメリカ社会への同化に成功したように、ドイツではトルコ移民を不可触賤民化して差別することで、トルコ移民以外の移民のドイツ社会への同化が進んでいる

●トッドの移民論……フランス・平等主義核家族で普遍主義

▼フランスは平等主義核家族で、普遍主義

パリ盆地を中心とする北フランスのみ

子供が成人すると親と別居して独立し、親の遺産は兄弟間で平等に相続

相続が兄弟間で平等に行われることから人間はすべて平等であるという認識を持つようになる

ヨーロッパで見られる四種の家族構造をすべて持つのはフランスだけ

南フランスには「直系家族」（権威主義的）が分布

中央山塊と地中海沿岸は「外婚制共同体家族」

ブルターニュには「絶対核家族」

▼ドイツ的「権威主義的家族型」の文化が存在

平等主義は放っておくとアナーキー（無政府主義）に陥りやすく、それを救っているのが、差異を重視するドイツ的な権威主義家族型の文化

この文化が周縁部に存在するお蔭で、フランスは国民国家としてまとまっている

最近、フランスで勢力を伸ばしている極右政党の「愛国戦線」の支持基盤は、このドイツ的な権威主義的家族型を持つ地域とぴったり重なる

▼1992年の調査……各移民に対してフランス人の何パーセントが敵意を持つか

最も敵意を持たれているのはマグリブ人（アルジェリア人、チュニジア人、モロッコ人）

マグレブは「内婚制共同体家族」の地域

いとこ同士の結婚が推奨されるが、その点がいとこ婚をタブー視するフランス社会（平等主義的核家族）と馴染まない

人口の10パーセントに相当する500万人もいる

しかしながら、マグリブ人女性の15.8%はフランス人と結婚 →同化が進んでいる

民族としては敵意を持つ人が少なくないが、隔離はまったく起きておらず、個人としてフランス人と結婚するのは問題がない

つまり、マグレブ移民とその子孫は、社会集団としてフランス社会では嫌われているものの、個人レベルではフランスへの同化が進んでいる

移民	敵意を持つフランス人
スペイン・ポルトガル人	8%
仏領アンティル人	12%
アジア人	18%
ユダヤ人	18%
アフリカ系黒人	21%
マグリブ系二世	36%
ロマ	38%
マグリブ人	41%

▼アフリカ黒人移民は多様であり、「黒人」という分類は無意味

父系家族のソニンケ人を主体とするマリ移民は、近代化が遅れている

一子相続で直系家族的社会を営む

在仏マリ人の私生児の比率は2%、大学生の比率は2%、出産率は10.3

在仏カメルーン人の私生児の比率は43%、大学生の比率は26%、出産率は2.6

私生児率の高さは、女性の地位の高さを示す

低い出産率は、近代化が完了していることを示す

マリ人を父とする子供のうち母がフランス人なのは2.1%、セネガル人では6.2%、その他のアフリカ人では16.7%であり、明らかにマリ人の統合が遅れている

▼フランス人は、混血への無頓着

「黒人によるフランスの侵略はまことに急速に進展したので、いまやヨーロッパの地にアフリカ国家が誕生したと、紛れもなく語ることができる」（ヒトラー『我が闘争』）

フランスの同化作用は個人に働くものであるため、移民社会は容赦なく破壊される。

マグリブ人は父系内婚制共同体家族で普遍主義であるが、北フランスの双系外婚制の平等主義核家族とは正反対であり、普遍主義同士で衝突することになる。

▼平等主義核家族の自由で平等な価値観は移民にも与えられる

少数派が弱者として暴力を受けるのに甘んじることはなく、移民も反撃する

多数派から少数派へ一方的に暴力が加えられる差異主義のアメリカ、イギリス、ドイツとは異なる

▼多文化主義では、移民問題は解決できない

移民の母国の文化を尊重し、同化を強制しない多文化主義は、結果的に移民を隔離し、受け入れ国と文化との軋轢を生む

フランスでは、「郊外」の低所得者向け団地に移民やその子孫が多数居住

フランス人（白人）の低所得者も住んでいるので、移民だけが郊外に隔離されているわけではない

イギリスのパキスタン系、ドイツのトルコ系のような、イスラーム原理主義はフランスには存在しない

▼『移民の運命』（1994）における結論

移民を隔離したり、排除したりするのではなく、同化すべき

フランスは独善的に同化を押し付けるのではなく、「率直で開かれた同化主義」を

●超大国アメリカの凋落を警告した『経済幻想』と『帝国以後』

▼『経済幻想』（1998）

家族制度が社会制度に決定的影響を与えるという独自の視点

→ 経済構造も国（民族）によってさまざまな形態をもつ

資本主義といっても、一律ではない

米英アングロ・サクソン型の「個人主義的資本主義」

日独型の「統一的資本主義」

「グローバリズム」は、米英型資本主義を唯一の規範として推進されている

世界はもっと多様で、価値の押しつけは危険

アメリカ経済は、金融に過剰に依存していて、脆弱

→ リーマン・ショック（2008年9月）を予言、警告

▼『帝国以後』（2002）

貿易収支の赤字の急速な増大を通してうかがえる、アメリカの工業生産の不振

アメリカは膨大な赤字を、基準通貨たるドルの力で全世界から引き寄せて資本流入をはかっている（欧・日が築いた世界の富を吸い上げて自国民の巨大な消費を賄うシステム）

これは貢ぎ物で成り立っていたローマ帝国に似るが、帝国にふさわしい普遍主義ではなく、アングロ・サクソン固有の絶対核家族に内在する差異主義（黒人・マイノリティ差別）に陥っていて、不安定

世界はアメリカなしでもやっていけるが、アメリカは世界なしにはやっていけない

やむなく弱小国（アフガン、イラク、イラン、北朝鮮など）を世界に対する脅威に仕立て上げ、アメリカが世界にとって不可欠であることをアピールして、「劇場の小規模軍事行動」で需要を作り出している

・つまりアメリカは世界の守護者ではなく、世界秩序の安定の攪乱要因になっている

仏・独・日・露は新しいユーラシア観にもとづく連携を深めつつ、アメリカからの離反・独立を志向するべき

アメリカの覇権は2050年までに衰退し、普通の大国になるだろう

仏、独の政策に影響を与えた

●世界で流行った「文明の衝突」論

▼ハンチントンの『文明の衝突?』（1993）

サミュエル・P・ハンチントン……アメリカ合衆国の国際政治学者

冷戦時代の戦略理論家（ハーバード大ジョン・オリン戦略研究所所長）

世界を8つの文明に分類

1. 西洋文明（アメリカ+西洋+オーストラリア）

2. イスラーム文明（中東+北アフリカ）

3. 儒教文明（中国）

4. 日本文明（孤高）

5. ヒンドゥー文明（インド）

6. スラブ文明（ロシア）

7. ラテンアメリカ文明（西洋に近い）

8. アフリカ文明（文明として成立するか曖昧）

冷戦以後の世界では、文明間の衝突が問題となると主張

優位だった西洋文明に対して、地域主義（民族主義）や宗教的原理主義が台頭して、「文明の衝突」が起こる → 最悪、第三次世界大戦が起こる

ユーゴスラビア内戦、湾岸戦争、中国の台頭

とくにイスラーム文明と儒教文明が台頭して、西洋を脅かす

アメリカはヨーロッパや日本と関係を緊密にして、脅威に対処すべし

日本が一個の独立した文明として扱われたことで、日本では大評判

9.11後は、ハンチントンの予言が当たったという評価が高まる

各方面から批判が寄せられる

文明論、文明史的理解がまったくない

西洋文明をアングロ・サクソン主導でまとめようとしている

ソ連に代わる新たな「アメリカの敵」を探し出そうとしたもの（イスラームと中国）

中国を「儒教文明」と呼び、日本を独立した文明と扱ったのは、日本と中国が「東洋文明」を形成することを防ぎ、日本をアメリカの側に繋いでおくため

●イスラーム脅威論に反論する『文明の接近』

▼『文明の接近』（2007）

人口学者のユセフ・クルバージュとの共著

「イスラームvs西洋」の虚構に反論

『帝国以後』の「補足」として、イラク戦争開戦後の「対テロ戦争」を位置づける

欧米社会にはびこるイスラーム脅威論が虚構であることを明らかにする

文明は衝突するのではなく、接近していく

→ハンチントン批判

目次……序章 文明の衝突か、普遍的世界史か／第1章 歴史の動きの中におけるイスラーム諸国／第2章 移行期危機／第3章 アラブ家族と移行期危機／第4章 非アラブ圏のイスラーム女性――東アジアとサハラ以南のアフリカ／第6章 アラブ圏以外の大中東圏／第7章 共産主義以後／第8章 妻方居住のアジア／第9章 サハラ以南のアフリカ／結論

▼男性識字化と移行期的危機

「識字化」を男性と女性で分けて考え、「移行期」とは何かという問いに答える

男性の識字率が50%を超えると、その社会は近代への「移行期」に入り、「移行期危機」を経験する

息子たちは読み書きができるが、父親はできない（文盲）

先の世代への不信感が起こり、伝統文化の継承が断絶

流血と殺戮を伴う移行期的危機が起こる

イギリス：ピューリタン革命（クロムウェル独裁）、フランス：フランス革命、ロシア：ロシア革命、中国：文化大革命、ドイツ：ナチズム、日本：軍国主義（国家神道ジハード）

▼女性識字化と近代化

男性の識字化に続いて女性の識字化が50%を超えると、やがて出生率の低下が起こる

その社会の心性的・文化的な近代化が静かに進行

社会の権威関係を揺さぶり、他律的に他者の権威に服従するのが困難になる

自律的な判断をもった人間が生まれ、経済発展や政治の民主化が促進される

イスラーム圏の出生率は急速に低下している

1975年：6.8人 → 2005年：3.7人

イランとチュニジアではフランス並みに低下

イスラーム圏も他の地域同様に、近代化が進んでいることの証左

イスラームは、けっして近代化を受容できない宗教＝近代文明の敵、ではない
出生率が低下しているのは、イスラームにおいても脱宗教化が進んでいるから

ヨーロッパでは、出生率の低下の前に脱キリスト教化が起こっている

▼移行期的危機としてのイスラーム主義の伸張

大部分のイスラーム諸国（イスラーム地域）では、人口学的テイクオフは終わっている

イスラーム主義（原理主義）という移行期的危機も、全体としては危険区域をすでに過ぎている

イスラームでも、スンナ派とシーア派の亀裂に目を向けるべき

ヨーロッパでは、カトリックとプロテスタントの相剋が、大きな歴史的要件
シーア派女性の識字化の向上と内戦の激化にかなり強い対応がある

▼国・地域ごとに見た特殊性

理論通りに進展している地域、いかない地域

例外をどう説明するか

少数派による「ゆりかご戦争」と経済的（政治的）要因

イスラエルのユダヤ人は高い出生率を保持

パレスチナ人は経済的に困窮して未来に希望が持てず、出生率が低下
宗派的特殊性

シリアにおけるスンナ派とアラウィ派の相剋

識字化先進地域と後進地域の出生率低下時期のズレの少なさ

石油経済化によるアラブ圏の急速な富裕化で下がらない出生率

原油価格暴落によるアラブ圏の財力低下で引き起こされた出生率低下

石油資源に乏しいエジプトの地位の低落

アラブ圏に共通する内婚制共同体家族

イスラーム以前から広がる強力な父系制と女性の地位の低さ

男子出産まで産み続ける父系システムと意識改革

非アラブ圏のトルコとイランの相違

世俗主義とシーア派革命

出稼ぎ・移民が持ち帰る異文化

サウジアラビアのワッハーブ派教義の輸入

フランス文化のマグレブ地域への普及

東南アジアの母系的社会（妻方居住婚）の特殊性

女性の地位が高く、アラブ的イスラームとは異なる辺境のイスラーム

サハラ以南のアフリカに固有の一夫多妻制

ムスリム女子の嬰兒殺し率の低さ

▼パキスタン北部での検証

親しくしている家族の構成とトッド流の分類

無文字社会を実際に体験

カラーシャ族は、外婚制共同体家族

父親の家に兄弟が同居して、均分相続する（家は末子相続）

兄弟間の競合意識が高い（家を出て、自分の家を作る）

政治的・宗教的リーダー不在の無頭社会

チトラルと部族地帯（パシュトゥン族）は、アラブ圏と同様の内婚制共同体家族

父方の平行いとことの婚姻を奨励

叔父-姪の関係と舅-嫁関係による女性の地位の確保

▼識字化と出生率

カラーシャの場合はまだまだ先か？

識字化達成はおそらく2000年頃から

1982年頃よりも人口が1.5倍ぐらいになっている？

公衆衛生の改善や救急搬送が可能になって乳児死亡率が低下

カラーシャ（異教徒）であるおかげで、援助金が入る

チトラルの上流階級の場合

教育を受けた家庭でもまだ子沢山

教育を受けていない女性でも近代的思考の持ち主の場合は少子化？

部族地帯のパシュトゥン族の場合は、まだ「テイクオフ」以前

首都（イスラマバード）のイスマイリ派家族は、やや少子化か？

●西洋と東洋の思考法の違い

▼木を見る西洋人 森を見る東洋人——思考の違いはいかにして生まれるか

リチャード・E・ニスベット著／村本 由紀子訳／ダイヤモンド社

序章：世界に対する見方はひとつではない／第1章：古代ギリシア人と中国人は世界をどう捉えたか／第2章：思考の違いが生まれた社会的背景／第3章：西洋的な自己と東洋的な自己／第4章：目に映る世界のかたち／第5章：原因推測の研究から得られた証拠／第6章：世界は名詞の集まりか、動詞の集まりか／第7章：東洋人が論理を重視してこなかった理由／第8章：思考の本質が世界共通でないとしたら／エピローグ：われわれはどこへ向かうのか

▼中国人留学生の指摘で、東西の思考の違いに初めて気づく

「私はこの世界を円だと思っている、先生は直線だと思っていることです」

中国人は、ものごとは絶えず変化しながら、結局は元のところに戻ってくると考える

モノとモノの関係を探ろうとする

全体を見ずに一部だけを理解することはありえない

西洋人が生きているのは、もっと単純でわかりやすい世界

全体の状況ではなく、目立つ物や人に注目する

▼ヨーロッパ人の思考……分析的思考

「対象の動きは、単純な規則によって理解可能である」という前提の上で成立

ものごとをカテゴリーに分類することに強い関心を持っている

問題解決に当たっては、形式的な論理規則を適用することが有効と信じる

▼東アジア人の思考……包括的思考

対象を広い文脈のなかでとらえる

世界は西洋人が考えるよりも複雑であり、出来事を理解するためには、常に複雑に絡み合った多くの要因に思いを馳せる必要がある

形式論理学は、ほとんど問題解決の役には立たない

●簡単なテストでもこれだけの違いが

▼君は経営者として西洋派？ それとも東洋派？

〈例・1〉あなたは、次のどちらのタイプの仕事が好きですか？

- (a) 個人の独創性が奨励され、それを発揮できる仕事
- (b) 特定の個人に特権が与えられることなく、全員で一緒に働くことのできる仕事

アメリカ、カナダ、オーストラリア、イギリス、スウェーデン……90%が (a)

日本、シンガポール…… (a) は50%未滿

ドイツ、イタリア、ベルギー、フランス……両者の中間

〈例・2〉15年間勤務してきた優秀な従業員が、最近では十分な成果を上げることができないでいる

- (a) 年齢やこれまでの功績がどうであれ、解雇されるべき
- (b) これまでの15年の貢献を無視すべきでない。会社は彼の人生に責任がある

アメリカとカナダの75%が (a) を支持。韓国とシンガポールは20%が (a)。日本、フランス、イタリア、ドイツは30%が (a)、イギリス、オーストラリア、オランダ、ベルギーは40%

▼アジア人は広角レンズで見ているが、アメリカ人の視野はトンネル

水中の様子を描いたアニメーションを30秒間2度見せたあと、何を見たか説明させる実験

日本人は第一声で、環境について述べることが多い

「池のようなところでした」

魚も水中のさまざまな物や生き物も、環境と結びつけて認識する

アメリカ人は、中心を泳ぐ魚から話を始めることが多い

「大きな魚がいました。たぶんマスだと思います。それが左に向かって泳いでいきました」

どんな環境だったかにあまり関心がなく、魚も環境から切り離して認識する

アメリカ人は、「魚の気持ちになって考える」ことができない！

▼子育ての方法の違いが、文化の差を生む

幼児が不機嫌になって、壁におもちゃを投げつけた場合

日本人の母親は「ほら、壁さんが痛いって言うてるよ」と諭す

アメリカ人は、このような物体の擬人化はほとんどしない（できない）

おもちゃを使って遊ぶ実験で、アメリカの母親は対象物の名前を日本の母親の2倍も口にする
米「これはクルマ。クルマを見てごらん。これ好きかな？ かっこいい車輪がついているわねえ」

日「ほら、プープーよ。はい、どうぞ。今度はお母さんにどうぞして。はい、ありがとう」

→ アメリカの子どもは、世界が名詞から成り立っていることを学ぶ

→ 日本の子どもは、世界が関係に満ちていることを学ぶ

このような子育ての方法が、両者の違いに結びつくのかもしれない

●グローバル化の時代に

◆国際化ではなく、グローバル化

1980年代からさかんに用いられるようになった概念

文化や経済や社会生活の相互関係が、地球規模で増加している傾向を指す

「グローバル化 globalization」は、自由に地球のあちこちとつながっているようなイメージを与える

従来の「国際化 internationalization」は「国境」や「国家」を意識させる

モノ、思想、イメージなどが、「国境」に関係なく流通

しかも、インターネットなどを介して、流通の速度が高速化

自由にどこにでもいける。電話や電子メールで連絡も簡単

地球は村のような単一の共同体と見なしようとする人々も

文化的「他者」との関係が縮まったかのように見える

◆「グローバリゼーション」の現実とこれからの異文化間コミュニケーション

実際は、グローバルスタンダード＝アメリカン・スタンダードではなかったか？

単なるアメリカ化ではなく、文化と文化のコラボレーションがこれからは大切になる

3ヵ月日本文化のなかで暮らしていると、アメリカ人も次第に日本的考え方に染まり始める

「異文化体験」を積み重ねることが、新しい文化創造と相互理解へとつながっていく

文明の接近

——「イスラームvs西洋」の虚構

E・トッド＋Y・クルバージュ著

石崎晴己訳／藤原書店

九・一一以降、世界が西欧対イスラームの対立の時代に突入したと感じている人は少なくないだろう。ハンチントンの指摘した「文明の衝突」が、いよいよ現実のものとして現われてきたのだと。

ところが、文明は衝突せずむしろ今後は「接近」していくのだという画期的な文明論が、フランスから提出された。著者のトッドは、米国の覇権の崩壊を予見して世界的ベストセラーとなった『帝国以後』で知られる人口学・歴史学者。共著者のクルバージュも人口学者で、イスラーム各国の歴史を人口動態分析の視点から見えていくことよって、西欧社会に根強いイスラーム脅威論や敵視論を打ち砕こうというのが本書の狙いである。

そのために著者たちが注目するのが、識字率と出生率の関係だ。まず男性の識字率が五十%に達すると、その社会は近代化への「移行期」に入る。息子たちは読み書きができるのに父親は文盲なので、伝統的な権威や価値観が崩壊して社会は大きく混乱する。いま世界を悩ますイスラーム原理主義の台頭も、フランス革命やナチス期のドイツ、日本の軍国主義などと同様、移行期ならではの一次的な危機状況としてとらえられるという。

続いて女性の識字率が五十%を超えると、出生率の低下が起こる。教育で女性たちが自我を確立して「心性の自律的な変遷」が進み、社会が根底から変わる。そして実現されるのが、西欧と変わらぬ近代的な価値観をもった少子化社会だ。つまり、文明は接近する。意外にも、現在のイランは二・〇人と米国並みに出生率が低下しているが、だからEU入りをめざすトルコよりも近代化Ⅱ西欧化が進んでいると、著者たちは判断する。

こうして識字率と出生率をもとにイスラーム各国の歴史を見ていくと、近代化の過程や進捗度が大きく異なることに改めて気づく。それを説明するために著者たちが用いるのが家族制度で、父系原則をどこまで貫くか、いとこ婚を認めるか、相続は平等かなどによって女性たちの心

性に大きな差ができ、それがやがては出生率に直接的に反映されることがよくわかる。そこに宗教・宗派による違いを加えることで、シリアやレバノン、パキスタンなど、民族構成が複雑で安定していない国々の現状も的確に分析できる。

西欧をゴールとする直線的構図、多文化共存を認めないフランス流文化融合主義、一部のご都合主義的な解釈など疑問に感じる点も幾つかあるが、ここまで鮮やかにイスラーム圏の近現代史を描きだした著者たちの手腕には感服させられた。本文や付録のインタビューには他の国々や日本についての言及もある。人口動態学的文明論が世界史のなかでどこまで有効か、確かめてみたい。(評・丸山 純)

■エマニュエル・トッド……一九五一年フランス生まれ。人口学・歴史学者。主な著書に『ヨーロッパ大全』『帝国以後』
■ユセフ・クルバージュ……一九四六年シリア生まれ、フランス在住。人口学者。(月刊『望星』・2008年6月号)

木を見る西洋人 森を見る東洋人

——思考の違いはいかにして生まれるか

リチャード・E・ニスベット著

村本由紀子訳／ダイヤモンド社

ゆつたりと泳ぐ小魚の群れに、突如として侵入してきた大魚。そんな映像を見せられれば日本人なら誰でも、逃げまどう群れの恐怖心を語る事ができる。ところが米国人に魚たちの「気持ち」を尋ねると、なんと答えに窮するという。

本書は、西洋と東洋の思考の違いを社会心理学の立場から考察したものである。著者は米国人で、教え子の中国人留学生から「自分は世界を円と考えているのに、先生は直線として見ている」と指摘されてショックを受け、この問題を見つめるようになった。そして次々と実験を重ねて、両者の違いを明らかにしていく。

たとえば海中の映像を見た日本人は、石や泡、水草、さらに海底でじつと動かない生き物なども見ている。ところが米国人は、中心にいる活動的な魚についてはじつによく描写できるのに、それを取

り巻く環境はほとんど記憶していない。本書のタイトルのごとく、西洋人は分析的に一本の木だけを見つめ、東洋人は包括的に森全体を見ようとするのだ。

担当している大学のゼミの学生(中国人と日本人)に本書の実験を幾つか試みたところ、見事なまでに著者の見解が裏付けられた。同じ世界を見ていても東西で解釈がこんなにも隔たっているというのには、心底驚かされる。小魚の気持ち思いやれない人たちが、イラクやアフガンの民衆の心が理解できないのも当然だろう。

著者は、こうした差異が生じた理由を古代のギリシャと中国に求める。この部分の記述はやや常識的だが、相応の説得力を持つ。また、こうした文化の継承を「おもちゃをぶつけると、壁さんが痛がるよ」などと幼児をしつける東洋人の母親の子育て法に見ているのも興味深い。日本に数カ月暮らすだけで、米国人も東洋式発想を身につけるそうだ。異文化体験の蓄積が、新しい文化創造と相互理解への道を切り開く。(評・丸山 純)
(月刊『望星』・2004年9月号)

もう、服従しない

——イスラームに背いて、私は人生を自分の手に取り戻した

アヤーン・ヒルシ・アリ著

矢野野薫訳／エクスマレッジ

二〇〇四年の秋、オランダの映画監督テオ・ファン・ゴッホ(画家ゴッホの弟の曾孫)が暗殺された。イスラームの女性虐待を告発する短編映画『服従』を発売した直後に襲われたのだ。この作品の脚本を担当したのが本書の著者、アヤーン・ヒルシ・アリである。当時はオランダの国会議員だったが、もともとはソマリアの出身で、父親が勝手に決めた望まぬ結婚のために夫の待つカナダへと嫁ぐ途中、オランダに亡命。クルアーン(コーラン)の名のもとに抑圧されてきた自身の体験に基づく強硬なイスラーム批判を繰り広げて、移民問題に悩むオランダ社会を騒然とさせていた。

そんな背景を多少知っていたので、ム

スリムの友人を多く持つ私は半ば敵対心をいじめてこの自伝を読み始めたのだが、厳格な祖母に仕込まれて五歳の頃に三年前までの祖先の名前を暗唱させられる冒頭のシーンからぐいぐいと引き込まれて、著者に深く感情移入しながら一気に最後まで読み通してしまった。

著者はソマリヤの首都モガディシユで幼少時を過ごした。父は名門氏族出身の開明的な反体制活動家で、ほとんど不在気性の激しい母のもと、傲慢な兄と奔放な妹にはさまれて、ばつとしない子どもだったという。五歳のときに女性器切除を受け、大きなトラウマとなる。その後、一家はサウジアラビアからエチオピアへ、そしてケニアへと移住するが、キリスト教徒と隣りあつて暮らすうちに信仰に目覚め、一時は原理主義を説くムスリム同胞団の活動に深入りしたこともある。その一方で西洋の小説を英語で読みふけり、背教や背徳の思いに打ち震えながらも、恋愛結婚を夢見て思春期を送った。

幼い頃から男性への服従を強いられ、結婚前に処女を失えば父や兄による「名譽の殺人」が待ち構えている伝統社会で、若い女性がどのように苦悩し、自らの思いと葛藤を続けながら成長していくのか。その過程が簡潔な文体で赤裸々に語られていて、激しく心を揺さぶられる。

後半は一転して、寛容の国オランダで国籍を取得した著者が、乾いたスポンジのように西欧の思想や歴史を学んで自由と平等に目覚めていく、感動の物語となる。そして九・一一同時多発テロを契機に、イスラームの根幹にテロへとつながる思想が横たわるとして教祖ムハンマドを批判する発言を続け、過激派から「死刑宣告」を受ける。敬愛する父からの絶縁状、崩壊する家族、扇情的なメディア、政治的陰謀。現在も厳重な警護下の生活を余儀なくされているという。

信仰と世俗主義、規範と自由、伝統と近代、多文化主義と同化主義、部族と個人……過激な主張にはたじろぐが、いま世界が直面する問題を著者の人生を通して深く考えさせられた。(評丸山 純)

■アヤーン・ヒルシ・アリ 一九六九年ソマリヤ生まれ。九二年にオランダで難民として認められ、通訳をしながら大学

を卒業。一時期国会議員として活躍。(月刊『望星』・2008年12月号)

分断される世界 (インタビュー)

仏人類学・歴史学者のエマニュエル・トッドさん

2015年2月19日 朝日新聞朝刊

パリやコペンハーゲンの連続テロ、過激派組織「イスラム国」の暴虐と、人間の価値や文明を否定する愚行が続く。フランスを代表する知性はしかし、母国で370万人が参加した追悼と抗議の大行進をも冷ややかに眺めていた。そして「9・11」以降、何かにつかれたように好戦的になるオクシダン(欧米や日本などの西側世界)を憂える。

——フランスの週刊新聞「シャルリー・エブド」襲撃事件では、表現の自由と宗教批判、信者への配慮などが内外で論議を呼びました。

「表現の自由は絶対でなければいけません。風刺の自由も絶対です。つまり、シャルリーにはムハンマドの風刺画を載せる権利があります。そして、フランス政府にはそれを守る義務がある。だから治安を担う内務相の責任は大きい。常駐の警官が1人ではなく3人だったら、あれほどの惨事は防げたでしょう」

「一方で私にも誰にでも、無論イスラム教徒にも、シャルリーを批判する権利がある。イスラム嫌いのくだらん新聞だと、事件の後も軽蔑し続ける権利が完全にあるのです」

——でもそれを口にしにくい状況でした。国中が「私はシャルリー」一色になりましたから。

「事件後の私たちは、酔っ払いが馬鹿を言っただけで捕まり、∞歳から歳の子が(学校での「テロ称賛」発言の疑いで)

警察に呼ばれる国に暮らしています。国内メディアから20件ほど取材依頼がありますが、すべて断りました。何の得にもならない、心置きなく話せる環境ではないと感じるからです。本来は大統領さえののしれる国ですし、私もそうしてきま

したので、この現実には耐えがたい。人々の感情が高ぶっているのは安心して自由に話せません」

——何か脅しのようなものが？

「ありませんが、例えば仲間内のおしやべりで私がシャルリーを批判する権利に触れたとします。社会的弱者が頼る宗教を風刺するのは品がないぜと。すると相手は『君は表現の自由で賛成じゃないのか、本当のフランス人じゃないな』と決めつけるわけです。上流の知識層でリベラルな人々が、あの大行進に参加した人々がです。『私はシャルリー』が『私はフランス人』と同義になつている。私はシャルリーじゃない、つまり宗教上の少数派を保護し、尊重しなければと言つたとたん、本物のフランス人ではないと……」

「今日の社会で表現の自由を妨げるのは、昔ながらの検閲ではありません。今風のやり方は、山ほどの言説によつて真実や反対意見、隅っこで語られていることを押しつぶし、世論の主導権を握ることです」

——フランスの空気が変に？

「連続テロ以来、メディアも政治家も神話の中に生きている。私たちは米国人や日本人と同様、長所も短所もある普通の国民です。なのに、我々はテロに屈せず約400万人が行進した勇敢で素晴らしい国民だ、1・11(大行進)の精神だと。まるでその精神が国内問題を一気に片づけてくれるかの期待さえある。でも(移民が多い)郊外の問題は解決できないし、イスラム嫌いは広がっている。経済危機も雇用難もそのままです。神話を終わらせるのは、私の異見ではなく現実でしょう」

——移民を同化させる政策が失敗した結果とも解釈できます。

「イスラム嫌いは(同化政策を採らない)英独でも広がっている。フランスの不思議は、欧州で極右が一番強いのに、異人種、異教間の結婚が多い点です。移民の子孫も家族レベルでは社会に定着しています。テロ容疑者だけがムスリムではなく、成功して家を買う人も多い」

——イスラムを名乗る過激主義の横行は、かつてあなたが否定された「文明の衝

突」にも見えます。

「この世界では二つの危機が重なり合っています。まずは米欧、日韓など発展の先頭を行く国々の危機です。消費社会の先に目標を定める必要があるが、うまくいっていない。消費社会はむしろ退化し、日本を含む西側諸国では若者にしわ寄せが及んでいます。それはまず、出生率の低下に表れる。ドイツや日本は人口の減少に直面し、先行きがますます不確実、不透明になっている」

「もう一つの危機は、移行期にある途上国のもので。皆が読み書きできるようになり、人口増のペースが鈍り始めた社会。イスラム圏が典型ですが、かつてのフランスや日本が経験したように、そこには迷いと混乱、暴力がつきものです。例えば教育水準でも、地球上の社会すべてが同じ時代にあるわけではない。米欧日やロシアでは若者の30〜50%が高等教育を受け、自由競争が彼らの生活水準を押し下げています。他方イスラム圏の教育水準は、先進国の1900年ごろにあたります」

——発展段階が違う社会が共存しているということですね。

「この二つの世界(西側とイスラム圏)はまるで違う時代に生きているのに、グローバル化により人が盛んに行き来するようになりました。両者の間には常に、おかしな衝突や相互作用が起きます。中でもアラブ系住民が多いフランスでの混乱は著しい。この国のムスリムは、近代化に伴う問題と同時に、現代社会の危機、例えば学歴や若者の失業など、先進国特有の問題にも直面しています。彼らの苦境と中東の混乱を結合させて語るのはまるで幻想ですが、典型的な『衝突』の事例です」

■ ■
——過激派組織「イスラム国(IS)」が日本人を殺害したことについては何を思いましたか。

「恐ろしい話だが、パリの連続テロに比べると、より偶発的だと考えます。国内でテロが起きない保証はないけれど、日本は原油確保のためアラブ世界には気をつかってきました。パニックに陥ることはない」

——このような過激勢力を台頭させた責

任は欧米にもあります。

「はい。中東に近い欧州はイスラム社会とのしがらみが強い。(旧オスマントルコ分割時の)英仏の秘密協定や植民地支配にまでさかのぼれます。しかし、ISを生んだのは米国のイラク侵攻です。『欧米』ではなく米国の責任。米国が中東の政治的均衡を壊したのです」

「先ほど先進国と途上国の歴史のズレに触れましたが、西側世界の中でも時差がある。9・11後の米国は異常であり、欧州は分別ある古い世界として、それを戒める役回りを自覚していました。仏独の首脳が、平和主義者として共同で会見したんです。米国よ、正気に戻れと」

「ところがここ2年ほど、かつて米国が感染した好戦的なウイルスに欧州もやられた感があります。印象的なのは『ロシア嫌い』です。欧州はイラク戦争時の共同歩調を解いたうえ、ロシアにいら立つようになつた。米国の姿勢に近づきました」

——まるで冷戦期ですね。

「驚いたことに、賢明で分別があると思われたカナダや豪州までが好戦的になつた。スウェーデンもプーチンに敵しい。みんなロシアやアラブ世界にいら立っています。西側の熱病はまずリーダーの米国を襲い、欧州を巻き込み、好戦的な、いわば狂気が世界に広がつつある」

「70年代に米知識人の著書で見た『西側ナルシシズム』の言葉を思い出します。米国人の基本的な個性は、自分の中に閉じこもることだという分析です。自分しか関心のない個人が集まれば、自己偏愛的な社会ができあがる。地政学的には、自分たちこそ世界の真ん中だと考える国になる、というわけです。そんな傾向が先進国に拡散しているのです」

■ ■
「こちらのメディアは『国際社会が非難している』という表現を使いますが、それは米国+同盟国だけだったりする。中国やインドが抜けたら人類の半分以下かもしれない。西側世界は熱狂しやすく、自己偏愛や不寛容が膨らみ、世界全体が見えていない。大いに心配しています」

■ ■
——日本は大丈夫でしょうか。

「居心地は悪いでしょう。西側世界の一員なのに、米欧のように世界の中心だ

なんて思えないからです。日本は安全保障的に西側であり続ける必要があるが、こと中東対応では最低限の連帯を口頭で示しておけばよい。戦略的課題はまず中国です。米国、中国、ロシアとどう付き合うか。巨大な中国は不安定ですから、対米の次に重視すべきは対ロ外交だと思われまます。その正しい方向性がウクライナ危機でばやけたのは、日本にとっては痛恨事ですね」

Emmanuel Todd 1951年生まれ。
英ケンブリッジ大学博士。家族制度や人口による社会分析で知られ、70年代にソ連崩壊を予言した。

■取材を終えて

お宅での取材は2回目。いつもにもましてくつろいだ様子で、はき慣れたジーンズから青いシャツがはみ出している。髪をかき上げながら、機知に富んだいつものトッド節だ。ただ今回は、ある種の覚悟を感じた。国内メディアに口をつぐみ、外国の新聞に語り続ける境遇を、ナチス占領下の国民に英BBCから抗戦を呼びかけた先人にぞらえる。国を代表する知識人にそうまで思わせるフランスは、やはり正気を失いかけているのだろうか。あの大行進に参加した一人として考え込んだ。個人主義の権化のような国にして、これである。社会が一色になりそうな時こそ、もろもろの自由や理性は大丈夫か、覚めた目を光らせたい。

(特別編集委員・富永裕)

パリのイスラム教徒、苦悩の1週間 嫌がらせ多発

2015年11月21日23時55分・朝日新聞デジタル

130人が犠牲になったパリ同時多発テロから1週間となった20日夜、日常を取り戻そうとパリの街に出る若者たちの中に、イスラム教徒の姿もあった。国内生まれの過激派が関わった事件のせいで、イスラム教徒への風当たりは強い。それでも「テロはイスラムと無関係」と声をあげ、社会の連帯を訴えている。

「みんなと一緒に悲しみたいと思いここに来た」。20日、パリ中心部の共和国広場。モロッコ出身のイスラム教徒、アブドラ・アラビさん(40)は犠牲者を追悼する群衆の中にいた。「テロが起きて、一番苦しむのはイスラム教徒だ」

預言者の風刺画を載せた週刊新聞社が襲撃された1月の事件と違い、今回は市民が無差別に標的にされた。被害者には、複数のイスラム教徒もいた。

にもかかわらず、イスラム教徒に対する嫌がらせは事件後に多発している。全仏イスラム評議会によると、事件後の5日あまりで、イスラム教徒に対する暴行や嫌がらせが24件起きた。

パリ市内のアラブ料理店で働くイサクさん(22)は「正直、どうすればいいのかわからなかった」と語る。仏国内のイスラム教徒の多くはアラブ諸国からの移民の子孫で、フランス生まれだ。国民として自分たちも被害者だと感じるが、アラブ系に対する厳しい視線も感じる。

20日には事件後初めての金曜礼拝もあった。パリの大モスクに礼拝に訪れたハレド・ナセルさん(29)によると、説教師は聖典コーランの一節を引用しながら、テロを非難したという。

ナセルさんは「事件の責任がイスラム教徒にあるとは思わないが、私たちにできることはある。イスラムが民主主義と両立できると、発信していく必要がある」と語った。

仏国立アラブ・イスラム世界研究所のバンサン・ジェイセル上席研究員は事件後、フェイスブックの写真を仏国旗にするなど、宗教よりもフランス人であることを強調するイスラム教徒が多いと指摘する。「ただ、再び事件が起きれば、イスラム教徒はさらに苦境に立たされるだろう」と話している。(パリ＝渡辺淳基)

仏「イスラム嫌悪」拡大…暴力・嫌がらせ増加

2015年11月23日09時58分・読売オンライン

【パリ＝本間圭一】イスラム過激派によるパリ同時テロが起きたフランスで、イスラム教徒への暴力や嫌がらせが増えている。

実行犯の多くが仏国籍だったことなどを踏まえ、風当たりが強まっているのだ。オランダ政権は、国民の分断や、欧州とイスラムの「文明の対立」が深まらないよう警戒している。

南部マルセイユの地下鉄駅の出口で17日、頭を覆うスカーフ「ヘジャブ」を着たイスラム教徒の女性が、若い男に殴られ、軽傷を負う事件があった。イスラム団体「イスラム教フランス会議」によると、13日のテロ発生から19日までに、イスラム教徒への暴力や嫌がらせは、これを含めて24件発生した。

パリ北部で暮らすイスラム教徒のサワ・ブバクさん(38)は「イスラム教徒が嫌いなフランス人もいる。なるべく外に出ないようにしている」と打ち明けた。被害を避けるため、「ヘジャブ」を身に着けないよう娘に言いつける親も増えているという。

テロへの手紙FBにつづった遺族が語る 世界から共感

2015年11月22日05時06分・朝日新聞デジタル

130人が犠牲となった13日のパリ同時多発テロで妻を失いながら、テロリストに向けてフェイスブック上に「憎しみという贈り物はあげない」と手紙をつづったパリ在住のフランス人映画ジャーナリスト、アントワヌ・レリスさん(34)が20日、朝日新聞の単独取材に応じた。世界中に広がる反響に「私の方が圧倒されている。人々はあの手紙に、新しいものを見いだしたわけではない。平和や愛、寛容の中で自由に生きたいという思いを呼び起こされたのだと思う」と語った。

悲劇から1週間。仏政府は20日、非常事態宣言の3カ月延長を決めた。仏空軍は過激派組織「イスラム国」(IS)が支配するシリア北部を空爆。事件の首謀者とされるアブデルアミド・アバウド容疑者は死亡したが、各国はさらなるテロに対し警戒態勢を敷く。

レリスさんは「正直なところ、テレビもラジオもつけず、新聞も読ん

でない」と言った。「世界中からのメッセージを、じっくり読んでいます。読むたびに心を動かされる。いいかげんに読むわけにはいかない」

あの夜、パリ中心部のコンサートホール「ルバタクラン」で、妻エレヌさん(35)を亡くした。

遺体との対面まで2日かかった。病院という病院を捜し回った。「彼女を暗闇の中に置き去りにしたと思った。拷問のようだった」

《君たちに憎しみという贈り物はあげない。君たちの望み通りに怒りで応じることは、君たちと同じ無知に屈することになる》

テロリストへの言葉は、妻を見つけ出した後、保育所に預けていた1歳5カ月の長男メルビルちゃんを連れて自宅に帰る途中、少しずつあふれてきたという。

「憎しみに屈するわけにはいかない」と、自分に宛てて書き始めた言葉だった。同時に、息子への思いもあった。「彼には、世界に目を見開いて生きてほしい。世界を、より美しい場所にする人の一人になつてもらいたい」

メルビルちゃんに「お母さんは帰ってこない」と語りかけると、少しだけ泣いたという。「私も一緒に泣いた」。寂しさが募った時は、息子を抱いて2人でエレヌさんの写真をながめ、好きだった音楽を聴き、ともに涙する。「泣くことは悪いことじゃない。寂しい時には当たり前のことだ」

《私と息子は2人になった。でも世界中の軍隊よりも強い》。手紙に、こう書いた。保育所に週4日通い、ミニカーで遊び、公園に出かける。「普通の親と子の、ごく普通の毎日」を取り戻そうとしている。

レリスさんの手紙はフェイスブックで20万回以上共有され、日本を含め各国から無数のメッセージが届いた。「フランスやサウジアラビアのイスラム教徒からも届いた」という。「テロはイスラム教の産物ではない。問題は、宗教の名の下に操られた人々だ。人さえためらいなく殺せる。そんな盲目的な憎しみに、私たちは盲目的な愛で答えよう」

すべてのメッセージに返事を書き、いつか息子と、メッセージをくれた人たちと会う旅に出たいと思う。「私は何も特別な人間ではない。憎しみの感情に襲われそうになった時は、この手紙に立ち返って、生きる喜びを持ち続けたい」(パリ＝渡辺志帆)

「生きる喜び、持ち続けたい」 パリ・テロ遺族一問一答

アントワヌ・レリスさんとの主な一問一答は次の通り。

――同時多発テロの発生から1週間が経ち、人々はテロに負けまいと街に繰り出しています。いたるところでトリコロール（フランス国旗の三色）を見かけます。

正直なところ、テレビもラジオもつけず、新聞も読んでいません。人々が通りに繰り出し、街がトリコロールに染まっているとは知りませんでした。まさに「フランス人気質」の表れといえるでしょう。

テロリストは、私たちの自由を煩わしく思い、恐れ、攻撃する。その自由とは、考える自由であり、楽しむ自由、愛しあう自由、テラスのあるバーに行く自由、単純に人生を楽しむ自由です。それなら、私たちはこうした自由をもっと満喫することで応じようとするのです。ただ、それはフランス人だけの気質ではないようですね。世界中の人からメッセージをもらいましたから。

人々は、あの手紙に何か新しいものを見いだしたわけではありません。平和や愛、文化、寛容の中で再び自由に生きたいという意思を呼び起こされたのだと思います。誰もが「攻撃を受けるなら、私はこの思いをより強くする」という気持ちを抱いています。自分らしくあり続けられれば、私たちは勝てる。テロリストたちは、私たちより先に疲れ切ってしまうでしょう。

――手紙の反響は？

世界中から反響がありました。どれもが深く、親密で、長いものでした。「感動した」と書いてあるものもありました。「他人を疑う感情に心が支配されそうだったけれど、あなたのおかげで、深く考え、いたわりを受け入れる心を持つことにした」という人もいました。とても心を打たれました。これまでソーシャルネットワークは信用していなかったし、こんな気持ちになるとも思いませんでした。

――メッセージは読みましたか。

まだ全ては読んでいません。初めの300通を読み、一通ごとに心を動かされています。後で読むために、すべて保存してあります。メッセージをくれた人に、一つひとつにお返事しますと伝えたい。今はただ私の方が圧倒されています。これ以上何もできません。いいかげんに読むわけにはいかないので。メッセージの意味を正確に理解したいのです。

なぜ私の手紙に感動してくれたのか、メッセージをくれた人たちに直接会って知りたいとも考えています。今ははっきりとは分からないけれど、それぞれ個人的な理由で、感動してくれたのだと思います。

――イスラム教徒からもメッセージを受け取ったそうですね。

フランスや北アフリカ、サウジアラビアのイスラム教徒からもメッセージが届きました。「テロリストたちは神の名の下にやっているというが、それは私が祈る神ではない」と書いてありました。テロは、イスラム教の産物ではない。問題は、宗教の名の下に操られた人々です。人々に何かを吹き込むには、宗教を使うのが最も効果的だとテロリストたちは知っています。そうすれば、人さえためらいなく殺せる。そんな盲目的な憎しみに、私たちは盲目的な愛で答えましょう。ある女性は私にこう書いてくれました。「あなたに、私の盲目的な愛を贈ります」。とてもすばらしい表現だと思いました。

――なぜ手紙を書いたのですか。

妻と対面した後、少しずつ言葉が浮かんできました。彼女と2日間も会えず、病院という病院を探しました。その間、彼女を暗闇の中に置き去りにしたと思い、拷問のようでした。とてもつらかった。それが彼女と対面できて、感情が少しほぐされ、私は再び前を向きました。疑う気持ちは消え、彼女はここにともにいると分かりました。

彼女と会ってから、(息子の)メルビルを迎えに保育所に行きました。帰り道、言葉があふれてきました。一つひとつの言葉をじっくり考えましたが、とても早く書き上がりました。校正はほとんどしませんでした。それは、私が最初から表現したいと思っていたことそのものでした。

でも、自分以外の誰かと共有しようとは思わなかった。共有するとしても、息子や親戚だけと思っていました。

――憎しみが最初にわき出てきませんでしたか。

最初に感じたのは、憎しみではありませんでした。(事件が起きた)金曜日はいろいろな気持ちが入り交じっていました。彼女の安否が分からない間、二つの気持ちが共存していました。一つは、彼女は事件の渦中において被害に遭ったと考えることからくる、この上ない絶望です。それと同時に、被害を免れただろうという希望もありました。

その後に襲って来たのは悲しみでした。憎しみも続いたかもしれませんが、かろうじて踏みとどまりました。私は何も特別な人間ではありません。この先、不信にさいなまれることがあるかもしれない。でも憎しみの感情に襲われそうになった時は、この手紙に立ち返って、生きる喜びを持ち続けたい。

――手紙は息子さんにも向けられていますか。

この手紙は、間接的には息子に向けたものですが、何よりも自分自身に向けたものでした。私が彼に教えたいことでもあります。彼に重荷を負わせたくはありません。私が彼の人生に何をしてあげられるのか分かりませんが、彼がどうしたいのか選べばいいのです。彼の人生なのですから。

――息子さんにはこの状況を理解していますか。

話しました。少しだけ泣いて、私も一緒に泣きました。うそはつきませんでした。すべてを話したわけでもありません。彼女がどういふふうになくなったかは話さなかった。もう帰ってこないとだけ伝えました。

私と彼はいま一つのチームです。一緒に頑張らないといけない。彼は母親がいなくなったことを感じ取っています。寂しさが募ると彼は母親の写真をながめます。そんな時は一緒に話して、抱き合い、音楽を聴き、泣きます。泣くのは悪いことではない。寂しい時には当たり前のことです。

それ以外は、普通の赤ちゃんと同じ生活を送っています。保育所に週4日通い、ミニカーで遊びます。普通の親と子の、ごく普通の毎日です。

――ラジオで、息子さんには目を見開いてほしいと話していましたが、どういう意味ですか。

彼には、世界に目を見開いて生きてほしい。世界を、より美しい場所にする人の一人になってほしい。こうしたまなざしをもつことは、一つの本しか読もうとしないような人たちには、無益に思えることでしょう。でも私は、世界に美しさを見いだしてほしい。

――日本からのメッセージもありましたか。

日本からのメッセージも受け取りました。すでに読んだ300通の中にもありましたし、まだ読んでいない何百通の中にもあるでしょう。翻訳してもらわないといけません。そして直接お会いして、理解したいと思っています。

人々への興味をもう一度持ち始めなければ。私はジャーナリストですから。

メルビルを連れて、(メッセージをくれた)世界中の人に会いに行つて、話を聞きたいと思います。(聞き手＝渡辺志帆、ソフィー・デュピュイ)

パリ同時テロ 遺族の手紙に共感広がる

11月20日 7時16分

パリの同時テロ事件で妻を亡くした男性が実行犯たちに宛てたメッセージをフェイスブックに投稿し、「憎しみという贈り物はあげない。憎しみに怒りで応じることは君たちと同じく無知に屈したことになる」と述べ、憎しみを憎しみで返さない姿勢に共感が広がっています。

メッセージを投稿したのは、同時テロ事件で妻を亡くしたアントワーン・レリスさんです。

この中でレリスさんは「かけがえのない人、そして息子の母親である人の命を君たちは奪った」として、1歳5か月になる息子の母親である最愛の妻を亡くしたことの悲しみを表しました。

そのうえで、「憎しみという贈り物はあげない。憎しみに怒りで応じることは君たちと同じく無知に屈したことになる」としています。

そして、「君たちが小さな勝利を取めたことを認めるが、それも長続きはしないだろう。妻は私たちのそばにいる。君たちが決して行くことができない自由な魂の天国で妻と再会できることを私は知っている」とつぶっています。

さらに、最後には、「息子が幸せに自由に生き続けることが君たちを辱めるだろう。なぜなら君たちは、息子から憎しみを得られないからだ」と述べ、憎しみを憎しみで返さない姿勢を示しています。

レリスさんのメッセージはフェイスブックで友人から友人へと広がっていて、世界中の人々の共感を呼んでいます。

遺族から実行犯へ「君に憎しみは与えない」全文

11月20日 20時03分／NHK ニュース

パリの同時テロ事件で妻を亡くした男性が実行犯に宛てたメッセージをフェイスブックに投稿し、「憎しみに怒りで応じることは君たちと同じく無知に屈したことなる」などと述べ、憎しみを憎しみで返さない姿勢に共感が広がっています。メッセージの全文です。

『君たちは私の憎しみを得られない』

金曜日の夜、私のかかけがえのない人、そして息子の母親である人の命を君たちは奪った。

けれども、君たちは私の憎しみを得られないだろう。君たちが誰なのか知らないし、知りたくもない。君たちの魂は死んでいる。

無差別な殺りくの名目となった神が自分の姿に似せて人間をつくったのだとしたら、妻の体の中にある銃弾の一つ一つが神の心の傷となるだろう。

だから、憎しみという贈り物はあげない。

君たちは憎しみを求めたが、憎しみに怒りで応じることは、君たちと同じく無知に屈したことになる。

私が怖がり、市民を警戒の目で見て、安全のために自由を犠牲にすることを君たちは願っているのだろう。しかし、君たちの負けだ。私は変わらない。

何日も何夜も待ち、私はけさ、ようやく妻に直面した。彼女は先週の金曜日に出かけたときと同じくらい美しかった。12年以上前に激しく恋に落ちたときと同じくらい美しかった。

もちろん、私は深い悲しみに打ちのめされている。

君たちが小さな勝利を取めたことを認めるが、それも長続きはしないだろう。

妻は私たちのそばにいる。

君たちが決して行くことができない自由な魂の天国で妻と再会できることを私は知っている。

私と息子は2人になったが、私たちは世界中の軍隊よりも強い。それに、私はこれ以上君たちのために割く時間はない。

昼寝から目を覚ますメルビルのそばにいてあげなければならない。息子は生後17か月で、いつもと同じようにおやつを食べるだろう。そして、いつもと同じように私たちは遊ぶだろう。

息子が幸せに、自由に生き続けることが君たちを辱めるだろう。

なぜなら君たちは、息子から憎しみを得られないからだ。